
ドラゴンボール もう一つの地球での戦い

カイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンボール もう一つの地球での戦い

【Nコード】

N1101Z

【作者名】

カイル

【あらすじ】

孫悟空たちが活躍した地球とは全く違う軸に存在する並行世界の地球。そこにはZ戦士が一人も存在しなかった。そして訪れるサイヤ人襲来るとき…希望はたった一人だけ。この地球にいるサイヤ人彼にすべての希望が託された。

プロローグ（前書き）

こんな所での報告ですが・・・、実は荒しメッセージが送られてきました。内容は伏せますが大まかに話すと

・オリ主かいてるやつはキチガイ

・支離滅裂な批判

・行き過ぎた中傷

などです。相手の指摘にも納得できる部位があるので一概に否定ができません。なのでそのメッセージは削除してブロック設定をしました。ですが一言言います。・・・鬱だ・・・。。しばらくはその内容に書いてあった現在凍結中の作品に加え、更新を停止したいと思います。なるべく早く吹っ切って再開したいとは思っています。皆様、誠に申し訳ありません。以下一覧です。

機動戦士ガンダムSEED generation

ウルトラマンティガ 異界に現れる伝説の巨人

仮面ライダーW new story

仮面ライダーオーズ×ひぐらしのなく頃に 永崩し編

この作品はそんなときに励ましてくれた友人（作品にも何度か現実でコメントしてくれた親友です。）がDB大好きなので彼への感謝も込めて執筆させていただきます。

プロローグ

エイジ745、地球に1つの流星が降り落ちる…。

〃

〃

〃

・パオズ山付近の村・

「おや、婆さんや。何やら流れ星が落ちたようじゃな？」

「そうですねえお爺さん。どれ…少し見てきましようか？」

夜も深いとき、この村に住む老夫婦が外に落ちてきた流星を見に外へ出る。この老夫婦の家は村のはずれにある農家でもあったためほかの村民は流星には老夫婦以外は気づかず、みな眠りについていた。

「…え」

「おや！？」

「まあ！？」

その老夫婦の目に映ったのは…

「エエーン！！ブエエエーン！！！」

しっぽに傷を負い、頭からは血を流す裸の赤ん坊だった。

「赤子じゃないか！？しかもこんなに怪我をして…」

「ともかくお爺さん、家に連れて手当を…！！」

・翌日・

「すっ…すっ…」

「よくねむっとるわい…」

「ええ。死んだ息子にそっくりですね。」

「おお、そうじゃ！！この子の名前はカイトにせんか？」

「息子の名前をつけるんですか？」

「おう！病気で死んじゃったあいつの分まで元気に育ってほしいしよ…」

「ええ…元気に育ってね、カイト。」

…こうして、一人のサイヤ人が地球に育つこととなった。孫悟空や悟飯、クリリン、ピッコロといった？Z戦士？が存在しないこの？もう一つの地球？で…

エイジ761、サイヤ人襲来。そして、物語は動き出す。

プロローグ（後書き）

主人公カイトの見た目はアルティメットブラストのアバター主人公（OPにも出ている胴着（道着？）を着ている方）をイメージしてください。服装は結構様変わりしますのでその都度説明を挟みます。以下、簡単な設定。

カイト 16歳の地球育ちのサイヤ人。この物語の主人公。地球到達直後、衝撃で宇宙船のハッチが開き頭を強打。サイヤ人の荒さが消える。しっぽもその際の傷で無くなり再生はしていない。

質問、感想待ってます。あと告知。例によってオリキャラ募集。詳細は次回の「設定と人物」で。

設定と登場人物、オリキャラ募集

登場人物

カイト 年齢、16歳 種族、サイヤ人 c v 森田成一
エイジ 745年生まれ。血液型AB型。もう一つの地球（これ以降はA地球）に落ちてきたサイヤ人の青年。老夫婦に育てられ穏やかながらも勇敢な青年に成長した。幼少期に3度、少年期に4度恐竜に襲われ瀕死になっていながらも生還している。（傷も残っていない）村では山賊から村を守る自警の仕事を営んでいる。自身が血の繋がりがなくことを自覚している。老夫婦の若くして病気で死んだ息子の名をつけられた。

マツ 年齢、73歳 種族、地球人 c v チョー
カイトを見つけ、育てた老人。村では農夫として働いている。若りし頃は知る人ぞ知る武道家であり天下一武道会でも優勝した経験がある。カイトに戦い方の基礎を叩き込んだ。また、農業をする傍ら村の子供たちに組み手を教えたりもしている。

ウメ 年齢、69歳 種族、地球人 c v 山本圭子
カイトを見つけ、育てた老婆。村では夫の手伝いと子供たちの学校の校長を務めている。カイトが小さいときに様々なことを教えた。料理上手でありさまざまなレパートリーを持っている。カイトを見つけた際に近くにあった？オレンジ色の一つ星の玉？をお守りとして家に飾った。

設定

この世界は本編とは並行関係。もしも、Z戦士が存在しない世界だったら？というIF世界。一部の原作キャラたちはこの世界にも存在するが本編の人物とは基本的に別人。惑星ベジータは原作通り消滅している。

- ・オリキャラ募集

例によってオリキャラの募集。注意点は、

- ・あまりにも無理な設定をつけない
- ・あくまで主人公はカイトなのを念頭に
- ・必須項目は全部埋める
- ・登場時期、死亡はこちらが決めるのでご了承を

です。以下、テンプレです。使用技以降は必須ではありません。

名前：

種族：

声優：

勢力：カイトの味方、敵。非戦闘キャラか戦闘キャラかをそれぞれ記入。

設定：

使用技：戦闘キャラ以外ならなしもOK

容姿：

生年月日：

希望セリフ：例「俺は…超ベジータだ!!」「オラ、地球で育った孫悟空だ!!」など

たくさんのお応募を待っています。

第一話 サイヤ人襲来！迎えて、地球のサイヤ人と謎の大剣士（前書き）

第一話です、どうぞ！！

第一話 サイヤ人襲来！迎えうて、地球のサイヤ人と謎の大剣士

・パオズ山付近の村・

「ほっせ、わっせと…」

「じっちゃん、ちょっと狩りに行ってくるよ。」

「おう、カイト気をつけろよ?」

「あいあい。」

あれから16年…カイトはたくましく成長した。幼年期と少年期にマツとウメから様々なことを教わり、村の皆からも愛され育った一人の青年として。

・パオズ山・

「おっし。」

カイトは一人パオズ山に登り森林の中へと入っていく。そして…

「ほっ!」

見るからに急斜面な崖をいとも簡単に飛び越えていく。彼の目的地はこの先にある河だ。

「よっと。」

そしてカイトは勢いよく川に飛び込む。飛び込んだ場所から盛大な水しぶきが上がりそれが収まると静かな時が訪れる。…6分が経ったその時に、

「せりゃあ!!」

一匹の大きなワニが白目をむいて飛び出してきた。それに少し遅れてカイトも河から飛び出してくる。

「今日はワニゲット!さてっと、家に帰るか!!」

カイトはワニを担ぐとそのまま来た道に戻り、村へと急いで行った。

「今日は結構な大物が手にはいったしな!おっし、みんなにいい報告ができそうだな!!」

嬉しさを滲ませながらパオズ山を駆け抜けるカイト。だが、彼は知らなかった。今日この日、この日常は一変してしまうことに。

・パオズ山付近の村・

「おう、帰ってきたかカイト。」

「うん、今日はこいつが成果だよ。」

カイトはそう言ってワニを地面においた。

「おうこれまたでっけえあ!!」

「さすがカイ兄!!」

カイトがとってきたワニを見ようと村中の人たちが中央広場に集まってくる。カイトは多少照れながらもみんなからの祝福を受けた。

（でも…なんでだろう？今日はいつもよりも嫌な予感がする…。なんかとてつもないようなことが起きるような…）

・平原にあるとある道・

「イヤッホー！！！」

「ヒヤハア！！兄貴、最高ですね！！！」

とある道を暴走族とみられる二人組がバイクで駆け抜ける。そんな彼らの前方に大きなクレーターが見える。

「なんだあ！？こんなとこに大きな穴作りやがった馬鹿は！？」

「ほんと迷惑ですよ兄貴！！ここいらは俺らの縄張りだっていうのに！！！」

口々に不満を述べる二人であつたがそのクレーターの真ん中に球状の物体があるのを見つけた。

「兄貴、なんかありますぜ！！！」

「ほう…どれどれっと。」

彼らはうかつにも未知の物体に近づいてしまった。…カプセルの後ろから人が現れたにもかかわらず。

「……」

その人物は族二人を頭に付けた機械を通してみている。

「戦闘力2と3か…ゴミめ。」

…次の瞬間、その二人を謎の光が包み込み…爆発した。

・パオズ山付近の村・

「っ!？」

カイトは突如として大きな気が地球に現れたのを察知した。カイトはマツから武術を教わるとさまざまな書籍や映像を見て武術を勉強してきた。その中であつた気を使う戦い方をカイトは4年の時をかけて舞空術や気を使った格闘、気孔波といったものを独学でマスターしたのだ。カイトはその大きな気が現れた方角を見つめる。

「…ここから結構近いな。しかも大きいだけじゃねえ…。悪の心を持った気だ。」

カイトはその方向向けて走り出す。

「おいおい、どうしたんじゃカイト？」

「じつちゃん、なんか嫌な予感がする。村のみんなを外に出さないようにしてくれ!!」

「あ、おいカイト!!」

返事も聞かずにカイトは舞空術を使って空を飛び去って行った。

・平原・

「む？」

暴走族二人を殺した男性は機械が伝えた方向を見る。

「戦闘力…32？他と比べても高い数値だな？」

男性はクレーターから平原に降り立ち静かにその力の持ち主が来るのを待っていた。

「来たか。」

そして平原にその持ち主である、カイトが現れた。

「っ…あれは、」

カイトが目にしたのはボロボロの革ジャン。…先ほど殺されてしまった暴走族が身に着けていたものだ。

「お前は何もんだ！これはいったいどういうことだ！！」

「…貴様、バジルか！？」

「バジル…？俺はカイトだ！お前はいつたい…」

「俺はラディッツ。貴様、我々サイヤ人の使命を忘れたのか！？」

「サイヤ人…」

「成程。貴様は何も知らんのだな。では教えてやる！お前の本当の名はバジル！お前は戦闘民族、サイヤ人の一人だ！！」

「俺が…地球人じゃなくて…サイヤ人！？」

突然のことに混乱するカイト。ラディッツと名乗ったこの男はさらにこう告げる。

「サイヤ人は赤子のころに他の星へと送られ、その星に生きる者たちの命を奪うのが使命！貴様はその使命を忘れているのだ！！」

だが、この言葉はラディッツの思惑とは裏腹にカイトが明確に敵対する理由を作ってしまった。

「ふざけんな……！！俺は地球で育ったカイトだ！！俺が地球人だろうがサイヤ人だろうが関係ねえ…。お前がこの星の人たちを殺すつもりなら…俺はおまえを倒す！！」

「笑わせてくれる…！たかが戦闘力32のお前が、戦闘力1500の俺に勝てると思っているのかバジル！！」

「やってみなきゃ…わかんねえだろ！！はああああああああ………！！！！」

カイトは気を溜めはじめる。それに呼応してラディッツのスカウターにも変化が現れる。

「何！？戦闘力が上がっていくだと！？374…489…528…
740！？」

「行くぞお！！」

そのまま舞空術を使いラディッツとの距離を詰め、格闘戦に持ち込むカイト。対するラディッツはカイトの格闘乱打を両手を使って弾いている。

「威勢はいいが…こんなものかバジルよ！！」

「まだまだ！！」

正拳突きを受け止められたカイトはその場で軽くジャンプし回し蹴りをラディッツの腹部に叩き込む。

「ぐふう！？」

「喰らえ！！」

さらに至近距離でエネルギーを溜めた気孔弾を叩き込む。が…

「ふふふふふ…」

「な、何！？」

ラディッツはそれを受けてなお倒れない。それどころか不敵な笑みを浮かべながらカイトを見る。カイトはこのままではまずいと悟りすぐさまラディッツと距離を取った。

「これで終わりか…？なら今度はこちらから行くぞ…！」

ラディッツは地面を蹴り勢いよくカイトに向かってくる。カイトはすかさず防御態勢に入るがラディッツはカイトの寸前で姿を消した。

「え…？ぐわあ！？」

姿を消したラディッツはカイトの背後にいた。それに気づき振り向こうとしたカイトだったがその時にはすでにラディッツの思い拳を受けて吹き飛ばされた後だった。

「な…なんて重てえ一撃だ…！」

「ダブルサンデー…！」

「…！」

倒れるカイトにラディッツは気孔波技ダブルサンデーで追い打ちをかける。すんでのところでカイトは空へと逃れるがそれを読んでいたラディッツのアームハンマーで地面に叩きつけられる。

「うわ…！」

「サタデークラッシュ…！」

さらにラディッツは地面に伏しているカイトに向かってサタデークラッシュで追撃を行う。

「ぐわあああああああ…！」

カイトはラディッツの攻撃を避けられず背中に直撃をくらってしま
う。そのダメージは大きく背中からは血が滲みだしていた。しかも
頭から血を流し、腕にも血が滴っている。

「か…ちくしょう…つええ………」

「所詮は雑魚か…興ざめだな。消えろ。」

そして、ラディッツが地上に戻りカイトにとどめを刺そうとしたと
き…

「ほいさああ!!」

「何だ!？」

一人の男性が大剣でラディッツに切りかかってきたのだ。ラディツ
ツは体をねじり回避するが髪を少しかり切り落とされてしまった。
その男性はぼさぼさの髪に旅装束をまとった体の大きいたくましい
男性だった。

「おい、あんちゃん。大丈夫か？」

「あ…あなたは？」

「俺はグランツ。しがない旅びとき。」

「…!!地球人如きが…1100の戦闘力を持っているだど!？」

ラディッツはスカウターで測定した大剣の戦士、グランツの戦闘力
を見て驚愕した。

「ま、俺は特別な鍛え方をしてるからな。ほら、お前さんこの豆を食うんだ。」

「豆…?」

グランツは腰の袋から豆を一粒カイトに食わせた。豆をかみつぶし、飲み込むとカイトは今までの傷を感じさせないほどの勢いで立ち上がった。

「な、治った!!!!」

「ば、馬鹿な!? 致命傷のはずだぞ!! し、しかも…」

「なんだか知んねえが、力が溢れてくる!!」

カイトは改めて気を溜めていく。その気の量は初めにラディッツと対峙した時よりもはるかに多く、強大な気だった。

「戦闘力1380だと…!?!」

「おっし、反撃開始だ!!」

「まあ、成り行きだが…手伝うぜ青年! お前の名前は?」

「カイトです!!」

「見てておもしれえ奴だなお前さん。行くぜえカイト!!」

グランツも気を溜めてカイトともに気を纏いダッシュ。カイトはラ

ドイツの懷に飛び込むとアップーを決めて宙に浮かせる。

「ぐお!?!」

「グランツさん!」

「よし来た!」

そこに舞空術で空に上がっていたグランツがその大剣、竜神を振り下ろす。

「馬鹿め、両手剣くらいこの俺がよけないとでも…」

「なあ、両手剣は両手で扱うつてのは一般常識だぜ。でもなあ、俺はそんな常識知ったこっちゃねえんでな!」

なんと、グランツは竜神を片手で振り下ろしていた。そのため両腕が剣を持っていると思ひ込んでいたドイツはあいていた片腕で殴られてしまう。

「もらったあ!」

さらに落ち始めているドイツに対しカイトはフルパワー気弾を叩き込む。ドイツの着ていた戦闘ジャケットは既にボロボロになりドイツ自身も地面に墜落した。

「この…俺様を怒らせたなあ!」

ドイツはそれでもなお立ち上がり、恨みのこもった眼でカイトたちをにらみつける。

「おいおい、まだくたばらねえのかよ…」

「グランツさん、さっきの気弾を至近距離で叩き込んでみたら…倒せるかもしれません!!」

「おっし、試してみるか。」

突如として襲来し、カイトの秘密を明かしたラディッツ。そしてそのラディッツと戦うカイトの窮地を救った謎の大剣士グランツ。果たしてカイトはその手に勝利を掴むことができるのか？そして怒りに燃えたラディッツは何をしでかすのか？物語は今、始まりを告げた…。

第一話 サイヤ人襲来！迎えうて、地球のサイヤ人と謎の大剣士（後書き）

次回予告

よう、カイトだ！ラディッツのやつ、何をする気だ！？

はははは、あんなちゃんけな村俺がつぶしてやる！！

くそ…みんなを守るにはこれしかねえ！！…すまねえじっちゃんば
っちゃん…！！

次回、ドラゴンボール もう一つの地球での戦い

「村を守れ！カイト決死の特攻！！」次回も見てくださいな！！

第二話 村を守れ！カイト決死の特攻！！（前書き）

第2話目にしてカイトが・・・

感想とアイデアまってます。

第二話 村を守れ！カイト決死の特攻！！

「けりつけにかかるぞカイト！！」

「了解！」

ラディッツとの決着をつけようと一気に力を込めはじめのカイト。大剣を構え直し、いつでも振れる体制になるグランツ。

「ええい…なめるなよ地球人風情が！！」

対するラディッツもすでにエネルギーを溜め、攻撃態勢に入っていた。

「ダブルサンデー！」

再びダブルサンデーをラディッツは放つ。カイトはそれを見ると舞空術で空へと飛び立つ。グランツは気を竜神の刃に送るとダブルサンデーに向かって縦一閃に斬る。

「…竜王尾^{じゅうおうび}。」

真つ二つにされたダブルサンデーはグランツの左右を飛んでいき地面に衝突。二つのクレーターを作り出す。

「はああああ…だだだだだ！！！」

空中にとんだカイトはそこから気弾を連続で撃ちこむ。

「ぐおおおお！？」

ラディッツはダブルサンダーが破られたことにショックを受けていたためそれに気が付かず、気弾群の直撃を受けてしまった。

「はあああ、だりゃあー！」

「ぐふう…」

さらにカイトは力を込めた拳で追い打ちをかける。それに続くようにグランツも舞空術で接近し、

「竜神一刀！！」

ラディッツを容赦なく切り裂いた。が、それは戦闘ジャケットのヒビを大きくしただけで致命傷には至らない。しかもラディッツは体制を整えておりそのままグランツに向かって力強いアッパーをかます。

「うおおおお！？」

「グランツさん！？くそおー！」

カイトは空中に浮かばせられたグランツを見るとラディッツに向かって突進。連続パンチを繰り出す。ラディッツもそれを防ぎながらキックやパンチを繰り出していく。…高速でラッシュの攻防を続ける二人のサイヤ人。その均衡を破ったのは…

「だだだだだだー！！！」

「はあああああ！……もらったぞバジル！！」

「ぐああ！？」

ラディッツだった。彼の足がカイトの鳩尾にクリーンヒット。ひるんだ彼をミドルキックで蹴り飛ばした。

「カイト！！！」

「ぐおおお！？」

地面に勢いよく衝突したカイトは体中から血を出してもなお、立ち上がる。

「俺が倒れたら……村のみんなが……！！！」

「……やっぱ、俺あんた好きだわ。おもしれえ上に、度胸と根性がある。」

「そりゃどうも。じゃあ、いくぜえ！！！」

カイトは改めてラディッツに向かって舞空ダッシュ。グランツもそれに続いて駆け出す。

「おりゃあ！！！」

「せいっ！！！」

カイトのキックと竜神の斬撃が同時にラディッツをとらえる。

「サタデークラッシュー!!」

「ぐおおおおー!?」

しかし、ラディッツも負けじとグランツに向かいサタデークラッシュを放つ。グランツはそれを受け後ろにのけ反る。カイトはそれに慌てるもキックをそのまま繰り出す。

「がつ!?!」

そのキックは確実にラディッツの腹部をとらえる。そのまま、カイトは力を込めてラディッツを目いっぱい蹴り飛ばす。

「まだまだ!!」

カイトは気を纏った足でハイキック。ラディッツを空中に蹴り飛ばした後、空中に飛び上がりアッパーカット。そのまま受け身が取れないラディッツの上空に移動しエルボーアタックで再び地上に叩きつける。

「はああああ、だりゃあ!!」

そしてラディッツに向かってとどめのフルパワーエネルギー弾を放ちこむ。そして…大きな爆発が起こった。

・パオズ山近くの村・

「!?!」

「何でしょうお爺さん…さっきから胸騒ぎが止まらないんです。そ

れにさつきから遠くで起きてる爆発は……」

ウメは不安を隠せない。カイトが飛び立って行ってから遠くでは爆発や衝撃が間髪入れずに起こっている。

「カイト…死なんでくれ……！！」

マツは祈り始める。カイトが無事に帰ってくることには。

・平原・

一方の平原では…

「……ア………うう……」

煙が晴れてグランツが見たのは…ボロボロになったカイトと怪我やダメージの跡こそ見えるが体力やエネルギーは回復していたラディッツだった。

「な…そんな……っ！？まさか……」

「ふふふ、お前を殴った時にカケラだったがあの豆が飛び出してきてな。ありがたく使わせてもらった。」

「まさか………仙豆を奪われたのか………悪い、カイト………！！」

ラディッツは仙豆を奪い、それで体力を回復したのだった。そのせいで消耗していたカイトは万全のラディッツに滅多打ちにされてしまった。

「戦闘力も327まで下がっているか…。限界のようだな。」

ラディッツはカイトをまるで壊れた道具のように投げ捨てる。すでにカイトは虫の息だった。

「てめえ…ざけんなよ!!」

グランツは怒りを込めて竜神に気を溜める。

「ゴウゴン剛竜波!!」

グランツは地面に竜神を突き刺し衝撃波を繰り出す。

「サタデークラッシュ!!」

ラディッツもサタデークラッシュで迎撃。平原はその衝撃で次第に崩壊していく。

「くそ…やっぱ体力が…仙豆はあと一個…しかも半分…でも!!カイトお!受け取れ!!!」

グランツは袋を引きちぎり、瀕死のカイトに向かって仙豆の入った袋を投げる。

「なに!!? 渡すか…」

「やらせねえよ!!」

グランツは剛竜波の威力を上げ、対峙しているラディッツの動きを封じる。

「ウ……」

カイトは何とか仙豆を食べる。そして静かに立ち上がり…

「はああああ！……！」

気を全開。そのままラディッツに向かって勢いよく蹴りこんでいく。

「がはあ……」

キックによってサタデークラッシュを妨害されただけでなく剛竜波の直撃を受けて地面に膝をつく。

「おのれえ……戦闘力がまた上がってやがる……1970だと……！
？」

「うおおおおおおお！！！！！」

カイトは地面を蹴り、勢いよく走りだすとそのまま上空にジャンプ。

「当たれえ！！！」

上空からフルパワーエネルギー弾を再び発射。ラディッツを捉えた。

「なに！！？」

「まだまだ！！！！！」

カイトはエネルギー弾が当たると同時に舞空ダッシュでラディッツ

の上空に來ると勢いよくフックパンチを打ち込んだ。

「ぐほあ……」

地に伏しながらラディッツはあるものを見た。…カイトの村だ。

（ふふふふふ……勝つことができなくても…奴を絶望させることはできるようだな!!）

「くふふふふ、くらええ！フルパワーのサタークラッシュだ！
！！」

ラディッツは立ち上がると村に向かってサタークラッシュを放とうとする。

「なに、しまった!？」

「く!!」

予想外の方法を取ったラディッツ。グランツは急いでラディッツを切り倒そうとするが何分距離が離れており剛竜波を使ったとしても間に合わない。…それを悟ったカイトは高速でラディッツの目前に移動する。

「何だと!？」

「ぐ……」

カイトはラディッツの右手をつかみ動きを封じる。

「やめろおバジル！！俺を止められたとしても貴様も道連れで死ぬぞ！？」

「……最初から、その覚悟だ！！！」

「！！！」

・パオズ山付近の村・

家に帰ってきたマツとウメはキッチンの椅子に座りカイトの帰りを待っていた。…すると突然、カイトの写真が入った写真立てが割れてしまった。

「……」

「お爺さん……！！！」

「………」

二人とも、カイトの無事を祈るしかできなかった。

・平原・

「まさか…この俺が死ぬ……だと………」

「へ、へへ……油断した……な……。」

一筋の閃光が走った後、ラディッツは腹部に大けがを負い倒れこむ。そして、カイトも。

「カイトお!!?」

「グラン…ツさ…ん。お…俺のから…だ…村に…頼み…ます。」

「おい馬鹿か!!粘れ馬鹿野郎!!こんなところで、死んじまったら…!!」

「自分の…体…のことは…俺がよく…分かってますよ。…俺は、もう…無理です。」

「おいこら、起きろ!」

「ははは…無茶、言わないでください……」

そして、カイトは静かにその眼を閉じた。

「ククククク…あははははははは!!」

「っ!!まだ、生きてやがったのか…!!」

「落ち着け…どうせすぐに死ぬ。だが、その前に警告しておこう。…たった今、俺は仲間に連絡を取った。今日からちょうど、1年後だ……。1年後に、俺よりもはるかに強いサイヤ人が二人…この星にやってくる…。」

「何…だと!?!」

「せいぜい…おびえることだな…ふふふふふ…が……」

そういつてラディッツは絶命。後に残ったのは静かな不気味さが漂う荒廃した平原だった…。

「…カイトを……連れて行かないと……」

グランツはカイトの体を村に運ぼうとする。が、体を持ち上げようとした瞬間に体が消えてしまった。

「はっ!？」

・あの世 閻魔大王の宮殿・

「…ん？」

カイトが目を覚ますと……周りに鬼、鬼、鬼。さらに中央の大きな机の向こうには巨体な男が座っている。さらにさらに彼の頭の上には絵本に出てくるような天使の輪っかがついていた。

「…ここどこだ？そしてなぜおれは鬼に囲まれてんの??それ以前に俺って死んだ筈なんじゃ??？」

「…お前の名前はカイトで間違いないな？」

「あ、はい。あなたは？」

「私は閻魔大王だ。」

「あ、俺は今から天国行きか地獄行きを決められるわけですね？」

カイトは笑いながら閻魔に話しかける。が、閻魔は首を振りながら

告げる。

「残念ながらお前は天国にも地獄にも行けない。」

「え…ええええええ！？」

「代わりにお前を呼んでいる人がいるのでな。おい、あれを持ってこい。」

「「はいっ！！」」

閻魔は鬼たちに命令しあるものを持ってこさせる。それは……人間大砲だった。

「……なぜに？」

「いってこい。その人の頼みで私はおまえに肉体も与えているのだから。」

「へ?! ちょ、待って待って!？」

カイトは鬼たちに捕まり人間大砲に詰め込まれる。

「発射オニッ！」

「ぎゃあああああああああああああああ!?!?!?!」

ラディッツが告げた新たな脅威。だが、それに対抗する戦士のうちグランツは重症。カイトは死亡してしまう絶体絶命の危機。そんな

カイトがあの世で閻魔に告げられた彼を待つものとは？大砲で飛ばされたカイトが向かう先は？カイトの戦いはまだ、始まったばかりである…。

第二話 村を守れ！カイト決死の特攻！！（後書き）

次回予告

よう、カイトだ。いやゝゝまさか死んじまうなんてなあ…

暢気なこと言ってる場合かゝ！さっさと伝えて修行開始じゃ！！

おっと、そうだった…1年後に向けて頑張ねえと！！

次回、ドラゴンボール もう一つの地球での戦い

「修行開始！復活の希望はドラゴンボール！！」とところでドラゴンボールってなんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1101z/>

ドラゴンボール もう一つの地球での戦い

2011年12月6日23時48分発行